

中米・ニカラグア

三井物産の支店長夫妻との出会い



10年間にわたるパナマ滞在と、20カ国を超える中南米各国への幾たびかにわたる訪問の中で、最も思い出が深く、記憶に残る国はニカラグアである。なぜか――。

たぶん、命におよぶ危険の可能性にも何回か遭遇し、いつも緊張していたこと。それでいて、メンバーの類のない人の好きと純真な信心。在住の日本人メンバーが皆無のため、すべてにわたって頼られていたこと。そして、こんな緊迫した環境下ながら、夜は心の許せるメンバーとビールのジョッキを傾けながら、人生を語り、チステ(ジョーク)を取り交わした人間的な生の付き合いと温かさからくるものであろう。

ニカラグアへの初訪問は、パナマに赴任した3ヵ月後の1976年の9月。NSA(アメリカSGI)との打ち合わせでロサンゼルスまで行った帰途であった。マナグアの大地震から3年目、この地震で奇跡的に助かり使命を自覚、ニカラグア広布に立ち上がった今西夫妻との出会いから始まった。

三井物産の支店長を務める今西さんの家は、プール付の邸宅。インターコンチネンタル等のホテルもあったが、夫妻の希望とこちらの仕事の都合で何回かこの家に泊めてもらうこともあった。だがその後、サンディニスタ革命を前後して、夫妻は一時パナマに避難、しばらく滞在した後、日本に帰国された。以来、年2回ほどの割り合いで、自分がパナマからメンバーの指導、激励を訪れることになったのである。

革命前のソモサ政権は、40年余にわたる独裁政治であった。国の富の大半を一族が独占、国民は疲弊にあえいでいた。あの大地震のときの世界各国からの援助物資でさえ、被害者の手には十分には届かず、上部の官僚の懐の中に消えてしまったという。



青空マーケットに並ぶ果物

サンディニスタ革命の変容

――1979年、サンディニスタ革命が勃発した。同じ中米の隣国ということもあって、政府軍と革命軍との戦闘の様子は、日常的にパナマの茶の間のテレビに流れてきた。戦況は、アメリカと、キューバを仲介にしたソ連との駆け引きがこれに加わり、状況を複雑化させていた。

内戦の戦況は、ソモサ(政府)軍の非人道的なやり方が、国際的に非難されるようになってから、急速に反政府側(革命軍)に有利に展開していった。

アメリカのテレビ・リポーターが路上で倒れた。カメラは現場を克明に写している。そ

の無防備の彼に政府軍の兵士が発砲した。助けを乞うている彼に容赦なく打ち込まれる弾丸。銃声と共に地上に横たわったりポーターの体が、土煙の中で、10センチほど飛び上がった。なんともショックで残酷なシーンが世界の茶の間に飛び込んだのである。私も同じジャーナリストの一人として、あまりの生々しさに身を震わせる思いだった。

以来、国際世論の支援を受け、コマندانテ・セロことエデン・パストラ將軍の英雄的な戦いのなか、民衆の熱狂的な拍手と輿望をになって、サンディニスタ軍が首都マナグアに凱旋の入都をしたのである。

でも、歴史はなんとおもいもかけなかった方向に動いていくものか！独裁政権からの“開放の救世主”とあれほど歓迎され誕生したサンディニスタ政権も、当初の民族主義路線からやがて急速に左傾化、ソ連、キューバの援助を受けるなかで、いつしか“真っ赤”に変色してしまった。

そして今度は、左からの思想の統一と軍備の拡大化が進み、発言の自由の芽は再び摘み取られてしまったのである。そして自分のニカラグア訪問も、ビザの取得にかかるさまざまな手数から、入国の際の緑彩色の軍服を着た審査官(兵士)による嚴重な尋問と、精神的にもずいぶん気を遣うものとなったのだった。

子供たちが黄色いポンポンで我々を歓迎

「コンパニェロ アデランテ！（同志よ 前へ！）」

係官の入国許可の声に促されて空港出口の扉を開けると、いつも懐かしい顔々が私を待ちうけてくれた。

「オラ（やあ しばらく）！ ハビエル、エクトル、バヤルド、リヒア、アメリア・・・」私は荷物を地面に置くと、名前を呼びながら一人一人と抱き合った。「経済危機は極限に」「米軍の侵攻の可能性も」・・・こんなマスコミ報道のイメージとは対照的に、元気な明るい友の笑顔は、一気に私の心の中を明るくしてくれた。彼らは暗雲の消えないこの国の希望の象徴のようにさえ思えた。



会館の庭での踊り

1985年、メンバーは小さいながら、会館を賃貸で手に入れた。夜は壮年・男子部が交代で警備、昼間は婦人部が順番で清掃にあたるなど、会館は質素ながらよく整っていた。そして勤行の後「ワレナラビニワガデシ・・・」と開目抄の一説をスペイン語でそらんずる友の姿は、厳しい生活環境下にある国情と二重写しとなって感動的でさえあった。こんな世界にいと、一歌手の結婚式、ハネムーンをマスコミが血眼になって追う飽食日本の泰平楽が、まったく別次元の世界に思われてくるのだった。

それぞれの訪問に強烈な思い出が残っているが、その極め付きは、ロサンゼルスに工藤住職を案内して訪れた出張御授戒であった。その前の訪問地ベリーズからの飛行機が予定より2時間ほど遅れて、夕闇に包まれたサンディーノ空港に到着した。いつも通り時間を

かけての入国審査。税関をパス。建物の外に出ると、なんと 50 人余りの子供たちが黄色い小さなポンポンを高く掲げて 2 人を歓迎してくれていたのである。

「コンバンワ」「ヨウコソ」——日本人メンバーが誰もいないこのニカラグアで、片言とはいえ、一体だれが日本語を教えたのだろうか？ 灯火管制時のように、裸電球が 2 つ 3 つの薄暗い空港の駐車場へ向かう路上での子供たちの歓迎は、またこの後にくる感動的でドラマチックな儀式のファンファーレでもあったのだ。

後方から押されてくるような力強くリズムカルな勤行と唱題。質素な会館での御授戒と御本尊授与は、拭いても拭いても出てくる汗のしずくとあいまって、実に熱気のはらんだものとなった。

そんなメンバーの日常の苦勞を察して、セレモニア(儀式)が終わった後、工藤住職は全員のメンバーを夕食に招待した。宿泊していたホテルの中庭に約 40 人。丸テーブルを囲んで座った。私は住職の通訳を兼ねながら一緒にメンバーの激励に回った。

プールサイドのライトに照らされたメンバーの顔々が輝いている。日中の熱暑もおさまり、涼風が肌をなげる。頭上にはこうこうと白く輝く満月が——。国境付近ではいまだに内戦の硝煙が消えていないなか、いっぷくの絵のような別世界のこの光景を、私は生涯忘れることはないだろう。

厳しい入国審査と反革命分子への警戒

ただ、この中米の激動の時代にニカラグアを訪れたものとして、全体主義または共産主義がどう自由の制限や人権の抑圧を市民に、また外国人にまで押し付けているか、思想や発言の自由が当たり前となっている民主主義社会の一面と比較して記しておきたい。

まず、ビザの取得に際しては、顔写真が 2 枚必要。申請書には本人の学歴、職歴、家族構成のほか、宗教、両親についてのデータなど、それはそれは詳しい内容についての記述が要請される。



入国の審査ではいつも、何の目的で来て、どこに泊まり、いつ帰国するかといった質問がなされた。しかも、兵士風の審査官のいる受付は、カーキ色のカーテンで覆われ、こちらからは中が見えないようになっている。それだけでも、秘密主義と反革命分子への警戒ぶりが伝わってくる。出国に際しても、ふつう空港ではありえない、単なる荷物として出す大型トランクの中身のチェックさえあった。

私は、会合では、政治批判につながるような話は一切避けた。“カベに耳あり”。いつ、どこでそれが諜報機関に通じ、深夜にホテルのドアをたたかれるかわからない、と思ったからである。でも、個人指導などではそうもいかない面もあった。

座談会が終わった後、婦人部員のジョイスが、子供のマーロンを指導してもらいたい、と懇願してきた。15 歳になったマーロンは、政府軍の志願兵として家を出たいという。反政府サイドにあったジョイスの夫は、革命前にアメリカに渡ったまま、政治的理由で帰国

できなくなっていた。革命が、政治が、夫婦の間を完全に切り裂いてしまったのである。

再婚した母の夫(継父)と家庭になじめなかったマーロンは、そこで家を出ることにしたという。それに、男の級友の大部分はすでに“志願”して前線に行ってしまうている。このまま教室に残っていることは“臆病者”“卑怯者”のそしりをまぬかれない。だから自分も志願したい、というものであった。

国民(男)の全員徴兵は 18 歳という国の法律と内戦の状況、悩む若者の心を推し量って、私は次のように激励した。

「最後の結論は君自身が出すこととして、私は仏法者という立場から話しておきたい。まず、継父との関係については、難しい面もあると思うが、母の立場も考慮してあげて、とにかく一家が仲良く生活できるように、自分としても努力してみてもどうか」

「次に、政府軍に志願する件については、できることなら控えた方がよいと思う。15 歳だったらまだ“徴兵”の年齢とはなっていない。前線に出れば、当然、人(同じニカラグア人)を殺さなければならない場面にも遭遇しよう。どんな状況下にあろうとも“人を殺す”ということは、仏法の見から見れば、自身の生命に消えることのない“因”を刻むことになる。したがって、できるのなら避けた方がよい」

「同級生から“臆病者”“卑怯者”と言われたくない気持ちもわからないではないが、“自分は人を殺したくないから行かないんだ”と言い切っていく者こそ、また“真の勇者”とも言えるのではないか」

.....

ホテルのドアを叩かれないかと危惧しながら

——その夜、ナバロ支部長にこの件を報告すると、彼はやや心配そうな顔をしてこう言った。

「彼(マーロン)が、学校で担任の先生や校長に言わなければいいんだけど。これからは政治の方針にかかわるようなことは、一切触れないでください。ともかくホテルでも気をつけてもらわないと・・・」

つい3カ月前、政府批判をしたキリスト教の宣教師3人が国外退去を命じられたばかりという。彼の言わんとすることをもう少しまとめてみれば



もしマーロンが学校で、兵隊に志願しない理由を「今マナグアを訪れている日本人の仏教リーダーからそのように諭されたので」とでも先生に報告したとすれば、私は政府への叛乱分子をそそのかしている、ともとられかねず、「ちょっと軍本部まで」と、夜中にホテルのドアを叩かれることもなきにしもあらず、ということなのである。

私は、直接の政治批判や、そそのかしをした訳ではまったくなかったが、それでもこう言われてみれば、仏法者として“当然”と思って発言したことさえも、自らの身の危険につながっていたことを知って、体中から冷や汗の出る思いだった。

自分がかまるだけならまだいい（それも大変なことだが）。ただ、その身柄の引き取りに大使館などが絡んできたとき、創価学会の名前がマスコミにも出て、大変な迷惑をかけることになるのを恐れたのである。

心配しながらホテルでの一夜を過ごしたが、幸いにも、翌朝までドア叩きはなかった。ホッと胸をなでおろしながら、私は帰国のための空港に向かった。再び、出国の煩雑な手続きを、胸をドキドキさせながら済ませた。



すべてが終わると、私はガラガラと太陽の照りつける暑熱のサンディエゴ国際空港の地面を 50 メートルほど歩いて、TACA(エルサルバドル国営航空)便に乗り込んだ。最後の乗客が機内に入ると、搭乗口のドアが閉まった。機はジェット音を高鳴らせて地上を滑り出した。

「ケ スエルテ！（なんて幸運な！ああこれで助かった）」。

私は、座席のシートベルトを締めると、思わず遠くに走りゆく空港の建物に目をやった。

——恵まれきった平和の中にどっぷりと浸かっている人には、ちょっと想像もできないこのような場面も中南米にはある。日本では決して体験できない、やや大げさに言えば、生死をかけたスリリングな一コマであった。